

里見八犬傳 拾六篇 卷三十六



13
3416

曲亭主人編演

八犬傳第九輯下帙 下編之上

柳川重信繪畫



江戸書林 文溪堂精刊



八犬傳第九輯卷之二十六間端附言

稗史小説の巧致するや、情態を寫り得て異聞奇談人意の表ふるに在り、獨軍
旅攻伐の談を弄りて、里巷の小兒と悦ぶるもの、士君子の爲不道不足を啓言、水滸傳の
如も七十回より下、招安の事あり、宋江盧俊義等、其徒二百八人、宋朝の爲不道を在
ち方臘を征するに至りて、是を七十回までの新奇巧致の筆を比れ、頗劣れ、不似、其
金瑞七十回まで、施耐菴の作と、七十回より下、百二十回まで、羅貫中の中、作と、評、續
水滸傳と、毛鶴山が如し、善小説傳、奇見る者といへ、猶金瑞が評言と、信容と、其七
十回より下を續水滸傳といひ、いふ、必、吾嘗て、お見るより、あり、柳水滸傳、百二十回、
羅貫中が、一筆、成る、所、其、證、文、多、く、あり、然、る、に、彼、小説、を、評、定、する、に、李、贄、金、瑞
等の、い、は、れ、る、他、明、清、の、文人、墨、客、水滸、を、著、る、者、も、一人、と、して、彼、作者、の、筆、量、の
隱、微、ある、を、悟、れる、事、あり、故、に、吾、亦、戲、を、水滸、の、隱、微、を、發揮、固、字、評、と、命、じて、

八犬傳九輯卷二十六

文溪堂藏

拈花寔談とのまじりたる然のけれも老眼年々衰邁して今筆硯不如意ありぬ
果たぬや否と知むと左も右も本傳第九輯に至ると三十四皆軍旅攻伐の事
るもその多し四羅貫中の大筆をさし脩羅開諍の餘韻始の如くも況や已か如き
見まへん本傳力戰の談も看官の飽きさせぬ最難しとも難を極むて遊莫水
輕才の多し本傳力戰の談も看官の飽きさせぬ最難しとも難を極むて遊莫水
嶺の征伐一度に至りて七八人の義士を陣殺して最後宋江李逵を毒と仰ぎ
死に至れり看官遺憾なく思われぬ勸懲係る所果敢る局と結ぶる則作
者用心之然れ本傳の用意彼と同く其力戰の故も里見十世の采と拈花
あり実あり約束あり且性情仁義致す所實は大團圓の歎びと盡き足るべし看官本
傳の水滸の模倣せし所ありと知れり作者の用心始より水滸の因るを知りぬ
ひ然るも後世金瑞と相似る評者あり九輯軍旅の二十回を誣く續八
犬傳とて吾筆をさしとありん伏夫隱るを求め怪を述作の小説野乘の

果敢るも其大筆に至る必作者の隱微あり是を弄ぶ者其甚しき是を悟る者の
易くぬ昔も今も同くぬべし其故も吾常の公連者の戲墨と評する五林あり
所謂假とて真とて備えとて求る事評者其理論も好所引つる作者の深
意と生きたりて只其年紀の合つて見せしむ欲する俗に云穴棟の類なる前約
束ありぬ又あるまで結び出さし待たせ催促する事神異妖怪の始りて終り
出沒不可思議者然るも其出處來歴を詳せしむ欲り其消滅して終る所安
定するも求るの感の作者の本意ありぬ大凡の五林を知りて吾戲墨を
評する者ありぬ其真実の知音ありて是も益の辨る人も人我泰平の餘澤あり
飽きぬ食ひ温む被て文場あり遊者米錢をわきて暗譚は春の日と銷しぬ彼も
一時此も亦一時あり柳吾戲墨物の本の殊時好稱ひの張月及南柯夢
胡蝶物語小冊子の傾城水滸傳新編金瓶梅その他猶あり就中本傳の世の人

ひと喋々たる生を愛復して弄ぶ隨ふ江戸及浪速の戲場也。屢是ふよるる戲臺の
 中に見ゆ又大阪を淨瑠璃の作れるあり。其院本の長編也。四冊よりなり。其
 況錦繪の八犬士を画する者。京江戸大阪の年々彫りて。今も猶もその
 諸神社の画額及燈籠にも犬士を画する稀也。或寛頭店布簾刺製の金
 襦袢子或煙包圓扇紙寫小兒の肚被る畫を以て見たり。關卷軍記の岐坊講釋也。
 之を本傳を讀てて世渡り做せり。人の告る由依て知りぬ。其時尚稱ふかの
 如か至れる我らも教馬もさふの怪もあ。哉已戲墨の遊びより。吾慮あふ五
 十年客舎の盧生の枕を借るも。稍覺ぬ。比れ細字の懶く不如意なる。然本傳
 又五卷を稿と果其折則硯の餘滴の戲墨を足を洗ふ。欲去筆硯讀書皆排
 之。徐餘年を送る不至。静坐日長く思慮を少省。復少年の如くさるべし。
 天保十一年肆月小滿後五日 蓑笠漁隱



本傳前板第九輯卷之二十九以下五冊校閱送漏補正抄録

○二十九の卷 三丁右 頓智之功 功當小抄よ作るべし 三十一の卷の初丁

同卷 十丁右 野豬豺狼 猪の狼の撰寫 同卷 十五丁左 徳用由堅

削もて忽焉と もの下の行字

○三十の卷 二丁右 兵を拙策を貴ぶ 策の速の撰寫 同卷 二十九丁左

津の中 津の撰寫

○三十二の卷 二十丁右 厨のくへを 厨訓よりやのやを脱 同卷 二十三丁左

勁風 勁の撰寫

其他聊るの夏は作者老眼衰邁細書を見る小詳るを再校の發兌の後され。追てあ抄するの諸君子いぞ披閱の折雌黄を施しての補れる幸いなる也。

南總里見八大傳第九輯下帙下編上總目錄

卷之

三十

六

第百六十二回

悌順慈善流生口
莊介信義避三舍

第百六十三回

莊介設伏夜擒將衛
小文吾奮勇擊驚熊

卷之

三十

第百六十四回

殘兵奪刃賣窮君
水軍寄艦載敗將

卷之

三十

第百六十五回

挾一虜現八斷橋梁
放火豬信乃燒戰車

卷之

三十

第百六十五回

題目同前

卷之

四十

第百六十六回

以眾俠孝嗣援源公子
果西使來仁敗走景春

八大傳第九輯一百六十二回以下五卷目錄終



名けのたけきとあれど
 悔をさる心さういふ大不
 志りぬや 愚山人

上水四郎東三
 乃らまはし

赤飯如牛太盛勢
 乃らまはし

大傳九郎家三六

六

大傳九郎家三六



賢而事賢
 譬以魚水

大樟村王俊故
 乃らまはし

盾持備杖朝經
 乃らまはし

大傳九郎家三六

大傳九郎家三六



大傳七冊卷三六

七

大傳七冊卷三六



大傳七冊卷三六

大傳七冊卷三六



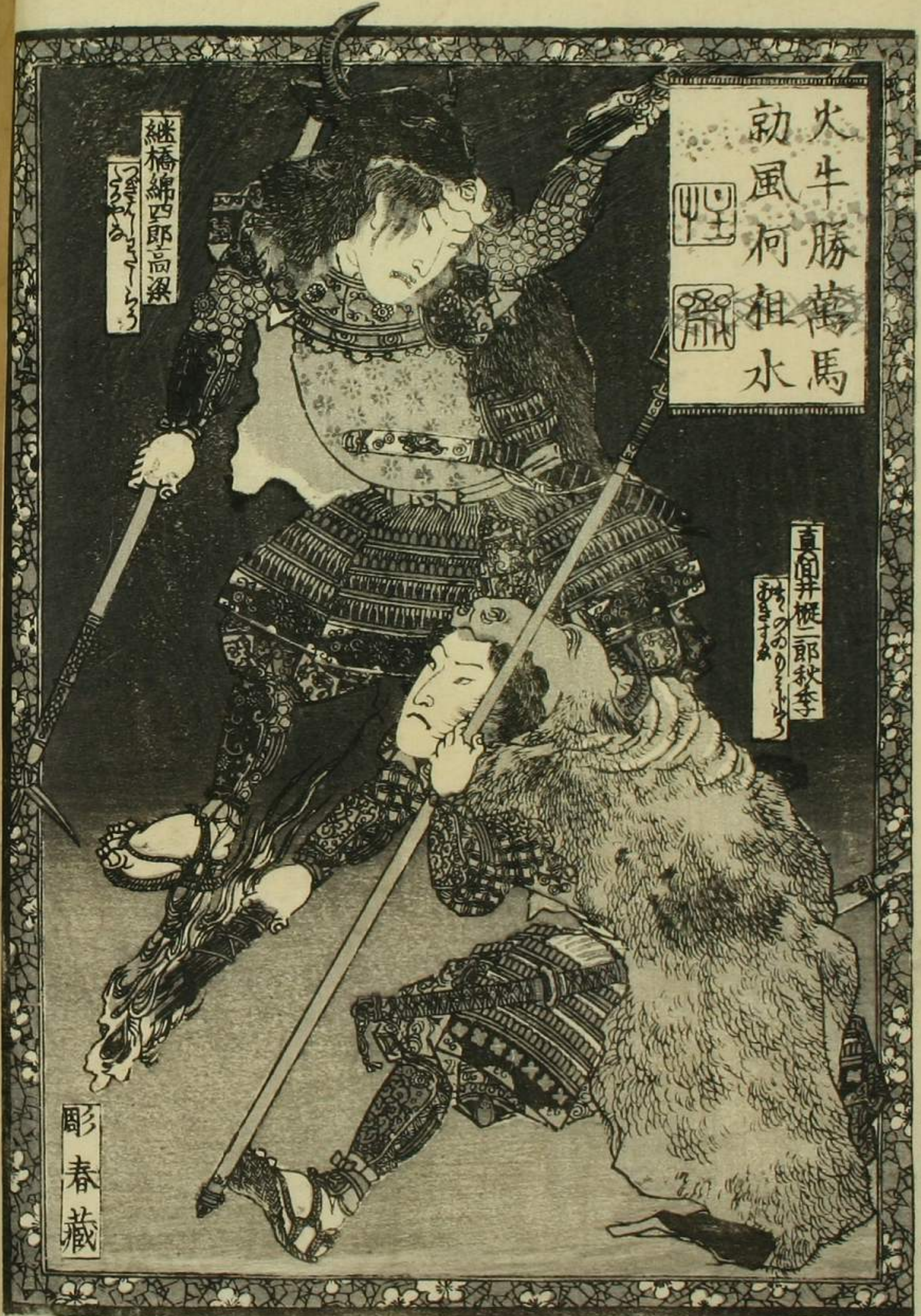
まのよねがさろく
 身あらあゝの尻に
 尾上のねといつを
 久しに 羊角人

狐龍精石
こりゅうしろうし

木曾元季元
きそげんきげん

大傳七冊卷二十六

七八



火牛勝萬馬
 勅風何相水

繼橋綿四郎高溪
つぎはしわたるたかなか

真面目権二郎秋季
まじめけんじあきあき

彫春藏
ちようしゆざう

大傳七冊卷二十六

七八

本傳前板第九輯卷之三十三以下五冊校閱送漏補正抄録

○三十二の巻十五丁右 嘆曰氣一七

○三十四の上十丁右 従一七 同十丁右 羨一七

同十五丁右 論一七 同十六丁右 蕭荷一七

○三十四の下三十三丁左 猿樂一七

○三十五の上初丁左 燈燭一七 同四丁右 憤一七

同四丁右 津衛一七 同十二丁左 原来一七 和女一七

便一七 亦賣出一七 後一七 知音一七 の見出一七 せ一七 を抄録一七 して一七 看官一七 の

再校抄録終

南總里見八犬傳第九輯卷之三十六

東都 曲亭主人編次

第百卒回 悌順慈善生口を流す

復説満呂再太郎信重安西就入景重然も負く思ひる満呂復
五郎重時が 矢場の 敵の 鉄砲を 敷き 水底に 淪れ 勢ひ 折り 哀し 堪え
只共 侶ら 歎げ 志と 励し 即使 再大 郎が 意見 就入 技術 又
那敵 の由断 らるを 今井 の柵の 横隊 柳の 枝垂 邊未 四死 潜ひ 途
就入 内入 入り 欲ま 怪む 件の 垂る 柳の 枝股 其年 非平 人あり
我を 招く 如し 朦朧 中に 安定 熟く 見れ 其人 の為体 鳥
草紙 の身甲 針脛 衣て 腰に 兩刀 を帶る 宛重 時を 似ら 再大 郎と

就ハ俱ハ驚ヲ且訝ト左右ヨリ我ヲ登時再太郎眉ヲ頻單テ安西和殿
如何見テ他ハ必我大人ノ亡魂ナリト云々云々云々云々云々云々云々
死シテも亡ビ今我ヲ導テ此ノ柵内ハ情入ラセテ俱ハ是軍功ト喜入ルヲ
助ケル鬼謀リ申セバ彼レハ就ハ點頭テ然也云々云々云々云々云々云々
去俯拜シテ南無大人精靈同志異體死生其方差アリとも我一雙ノ微力以テ
志ノ已ラレテをハク々憐ミの影ハ立ち形ハ添テ障リ今ハ柵内ハ
入ルニシテ彌陀佛々々々彌陀佛ト而聲ハ祈リ念マレ樹上ノ人聲耳カ
ケテ登テ再太郎就ハ我ヲ死セリト思テ我ノ方僅那溝戸ヨリ敵ノ發
テ大銃亦ラち摧レザリト一日其勢ハ逆テもわれ早も波ノ底ハ
淪テ再度ノ丸ト避ケル因テ意奈件ノ大銃ハ溝戸ヲ守ル敵ノ雜兵
我情近就ク見出テ殺殺々々ノ所ハ一時平時毎ハ他

必水回ハ空銃ヲ發シテ其成ノ勢ハ躬方ノ士卒ハ示シテ其故ハ我
身ハ聊モ恙ナラ然レドモ那里ニ敵ノ兵ノ睡在ルヲ猜テ浮
由水底ト潜リ辛ク也洲ハ剛才洞悉シ内ヨリ垂テ這柳ノ
枝ハ推テ樹傍ニ敵ノ虚実ヲ覗ハレ舊処ヘ入リ然レテ波連ノ便
宜示シテ共侶トテ思ハ折也云々云々云々云々云々云々云々云々
ゆゑ報知者ト再太郎就ハ所ノ情ヲ憶テ雀躍シ大々々々原未カ
折敵ノ溝戸ヨリ發ルハ空銃也大人ハ恙ナラ然レテ然レテ悟ル
れハ思ハ涙ノ涯ハ暴河ノ水も増テ其勢ハ逆テもわれ早も波ノ底ハ
如兩個ノ微力也大人ノ志ヲ紹ギテ退リ俱ハ成マシム人ハ面ヲ向ケ
かと思ハ那溝戸内ハ敵ノ守ノ固ハ大人ノ果敢ル殺シ得ル
守ノ敵兵憐ルともあるべし先ヤ這頭ヨリ潜ハ入リテそれ思ハ

侶の戦死せん。示合ら辛くして方僅に就ける。大人に及々恙なく早もあや
まきしを憂ひを轉て大喜大幸の上やゆる死叶悦しや。嬉しや心の隈もうち明て
悄の告る兩個の少年憐ると重時推禁せ。噫音高し。いそぐべからざる内を
見且さふ幸ひありて。林火捨る。無火の残れる。守の敵兵ある。我の續々と叫
び示して内へ閃りと飛降る。再太郎も就か。是れは力とて。俱に無る。枝の
推勢も。松登り堀を踏。情地内。内を入る。憊而。滿呂復五郎重時。兩
個の少年と共。侶も猶も。這柵内の敵の虚実を。視ふ。才も燃る。無火の背を推
向け。膝を抱き。打眠る。兩三個の雜兵在る。外守の士卒も。りれ。憶さる
うち。合咲れ。さし。無火の燃柴と。掖合ら。立別れて。東西守屋の檐。小
火を放つ。滿呂再太郎。信重。心早。少年も。初無火を。掖出。時。那打眠
る。雜兵の膝下。小銃砲あり。中。火索を。結び。て。九さ。八。管。を。奪。略。の。左。も。

引提。俱。小。軻。遇。突。智。の。拵。を。做。し。程。の。時。間。河。風。吹。暴。れ。て。寒。は。夜。を。れ。火。の
勢。以。林。を。む。ぐ。も。あ。さ。り。重。時。も。火。攻。の。瞬。間。燃。廣。く。て。車。輪。の。像。は。敵。と
飛。其。這。柵。内。在。り。と。あ。る。士。卒。們。も。睡。臥。さ。る。も。睡。ら。ざ。り。も。あ。さ。り。と。さ。る。小。槍
に。慌。々。走。り。去。り。俱。火。を。防。て。う。ち。滅。す。欲。せ。れ。ど。既。中。守。屋。毎。火。の。鬼。り
さ。る。隈。も。る。け。れ。誰。う。と。及。ぶ。相。罵。り。打。擲。して。小。鬚。を。焦。し。火。を。踏。て。叫。び。滾。ぶ
も。さ。り。の。け。登。時。第。二。の。守。屋。も。柵。頭。人。小。越。小。權。太。表。練。の。身。甲。の
二。紅。囉。呢。の。戦。外。衣。を。う。ち。披。り。馳。の。馬。も。う。ち。奔。り。て。小。眉。尖。刀。と。挾。み。従。ふ。士。卒。と
先。小。找。め。り。乘。り。半。多。の。聲。高。き。兵。毎。さ。ど。も。閑。る。當。所。河。上。也。素。より
水。小。匿。し。う。ち。疾。汲。上。て。火。を。滅。さ。せ。と。連。り。叫。喚。れ。諸。隊。の。士。卒。大。の。一。言。の
獎。され。氣。と。ち。直。て。合。武。骨。鉤。を。打。振。り。滅。禁。んと。競。ふ。蒐。を。表。練。威
風。凜。然。と。て。馬。を。風。上。小。立。眼。を。配。り。只。顧。下。知。を。做。し。程。小。滿。呂。再。太。郎。信。重。

闇方より窺近就て。携りて鳥背銃の火蓋を鎖と放せ。小越小權
 大表練の胸骨托地と敷を碎れて。馬より墜死せり。是れは敷馬諸隊士
 卒も原來内伐の者あり。然るに敵の間諜見か。放り火をあらんざらむ。下や
 人々疾獵出でて。捕捕せよと罵る。其れを。我も我も。疾獵する癖も。同士
 敷も。命を殞し。疾を負ふ者も。多る。事の紛れ。重時。再太就。共侶の
 這里。小頭。那里。小頭。隠れて。揮敷。小做。ある。柵。内。名。ある。兵。も。只。這。三。個。の。敵。の
 為。小。多。く。首。を。喪。ひ。け。り。有。徳。一。程。小。犬。川。莊。義。任。其。隊。の。軍。兵。一。千。五。百。餘。名。
 敷。十。箇。の。戰。艦。も。り。乘。る。を。從。へ。る。夜。丑。三。の。比。及。小。間。は。紛。れ。今。井。の。敵。の
 柵。小。推。寄。る。小。滿。呂。復。五。郎。重。時。も。り。柵。と。火。攻。り。刺。再。太。郎。信。重。が
 那。柵。の。第。二。頭。人。小。越。小。權。太。と。敷。捕。去。折。り。け。れ。柵。の。士。卒。も。一。人。と。く。仿
 然。戰。ふ。者。あ。る。と。壯。士。足。小。便。り。を。ゆる。士。卒。と。我。れ。溝。戸。を。敷。破。ら。る。無

入々々。諸勢齊一岸。小登りて。咄と揚げる。関の聲。あやしく。乱る。柵の士卒を。駢立
 駢立。我れ。と。ける。あ。れ。も。柵。の。頭。人。後。嶋。郡。司。將。衛。の。千。葉。自。胤。の。親。族。と。相。馬
 郡。領。將。常。の。弟。を。り。け。れ。名。を。惜。と。誂。り。と。恥。て。勇。ま。ぬ。馬。小。鞭。打。々。々。士。卒。を。獎。し
 敵。と。柱。を。一。重。毒。時。へ。挑。戦。ふ。の。う。う。壯。士。足。是。を。物。と。も。せ。ぬ。駢。を。摧。絶。銃。を。劈。く
 巷。路。軍。の。進。退。雄。々。あ。る。勇。將。の。下。小。弱。卒。を。り。け。れ。群。羊。と。駢。る。虎。彪。の。勢。ひ。當
 る。小。前。を。り。け。れ。小。背。も。り。滿。呂。復。五。郎。再。太。郎。安。西。就。共。侶。小。探。合。り。て。攻。る。程。の
 猛。火。頻。り。飛。散。り。て。柵。の。士。卒。の。頭。の。上。小。落。花。の。像。く。降。菓。れ。將。衛。竟。小。怖。難。て
 捨。鞭。中。て。後。門。より。馬。を。飛。し。命。を。脱。れ。木。下。川。堤。を。蒼。蒼。直。小。木。逆。井。を。投。て。逃
 る。衆。兵。俱。小。人。薜。打。て。其。里。と。も。分。む。乱。走。ま。る。中。小。後。れ。の。烟。小。噴。び。火。小。焼。れ
 臥。累。り。て。死。活。を。知。む。或。の。兜。を。脱。れ。支。を。伏。せ。跪。坐。哀。を。請。ふ。降。參。志。也。も。り
 う。の。け。然。れ。大。川。莊。義。任。の。事。の。勢。ひ。已。へ。る。ね。敵。の。捨。る。好。馬。も。り。踏。り。つ。隊。兵。を

找めく猶も獲嶋將衝を生拘んとて逐せりける。話分両頭是より先小大田小文
吾悌順其隊の兵千百十數名と共に幾十艘の戦艦を暴河に乗浮ゆ。
妙見嶋の柵を襲ふ那菓人を建てる艦十艘を先にして柵の水樓を推寄せ
る敵の水中の張巨一方大鏖索の既満呂再太郎が皆斫捨りければ這回
間近く潜寄れども聊も障りあらず倭而里見の士卒の先艦を既柵の溝戸
推寄せて関の聲を發け征箭を射出空銃を放りて攻蒐る死勢ひを示さ
真夜中過ぐる時候めて黑白も分ぬ烏夜を柵の士卒の敵の艦の多少を知
べくもあらず然らば這妙見嶋の柵の頭人彦別夜又吾數世の今寄來る敵の喊れ
聲箭叫び吐嗟とを驚駭の噪々士卒を制め若們もどて先度の思ひさ
敵の今宵も亦我矢丸を取んとて菓菓人を艦に建て空攻をまほの初我思ひ足
らば那術に乗せられりければ豈二も欺れんや闇なくと害めて毫も備を做さ

けり。介程小大田小文吾の妙見嶋の西岸へ隊の諸艦を潜よさせ大銃をのく
水際を堀をうち破り櫓を毀ち衆兵存一艦より出と吐と嘯はく二七二十一
柵入る勢ひ破竹のごとく當るべくもあらず柵の上卒驚駭慌て原來今宵の敵
那菓人あざざりけり不意を伐れて争何れ一圓を退せ五十子より來まは
御方と待てをうめれと罵り俱に逃迷へ彦別夜又吾怒りあは堪む逢一兵毎不
知案内敵と敵所不捉籠て擇敷ふ做さるる大はれ緒され首と浴てん找めくと
鎗見めりて近づ敵の兵を突仆一毆散とて先途と戦ふ程今井の柵の
かゝる猛火起りて敵河水を照りて白晝のごとく敵欲自家を君羊蜂の叫び漸々
そと柵の士卒等我より先今井の柵の攻落されぬと思ひかひく戦ふ擬勢るく
乱れて辟く中路も小文吾の先と先找とて敵と礮を擲る數世が鎗を打
落し逃る甲の総角を搔梳と引きて三間許投へ自家の士卒折累りて

是の前の版
第百十
回の下出
文と併見

厭々索とをひける。柵の頭人、今目前に生拘れられ、況士卒の立足も、逃ぐる。舩の
執業り、辛く命を免れんと。舩の岸に來り、誰か知る。死に豫より、大田が計る所
あり。自家の艦、士卒を送り、落んと欲する。敵を棄せ、且敵の繫糸を措き、衆舩に
舩械を奪ふ。其舩毎、一箇もあせざりければ、柵の士卒の稠乗る者、舩械をり
ま、夜河の舩の遺端を、心慌く。左せ、右せと罵る。程、風烈しく、流急ければ、憶
舩と海へ吐れて、往方も知る。者、中へ及て、舩を棄て、陸地へ脱れて
次の日、寄隊の陣を赴て、這敗軍と告者、才、西三名、過ぬ。或は、又鳥夜、紛
ま、里見の艦、無り。者、小文五を送り、守り。士卒の為、生拘られ、残兵
僅、百五六十名、只得。大田、降参りて、其の柵立地、夷けり。既、其時、天、
大田、小文五、悌順、柵の守屋、小登見を、建せ。生口、毎、実檢を、登時、里見、
勇士、猛卒、功、ある者、第一番、柵の頭人、彦別、夜、又、吾、結、る、索、と、最、

あ、捉縮て、小文五と相距ると。約、莫、一、大、許、中、て、大、床、の、下、牽、居、り、小、文、五、
相、り、夜、又、五、口、向、ひ、く。む、れ、數、世、汝、も、大、石、氏、の、家、臣、也、勇、士、の、稱、あり、這、妙、見、
嶋、の、柵、の、頭、人、と、言、え、る。と、脆、く、も、戰、負、て、阿、谷、と、と、虜、小、る。意、亦、勇、
士、と、い、れ、り。虚、名、の、を、あ、ん、む、ら、ぬ。と、詰、れ、ば、夜、又、五、の、眼、と、睜、り、て、然、之、蓋、世、の、勇、士、
と、い、ふ。も、運、盡、ぬ、れ、ば、阿、谷、と、と、敵、の、虜、小、做、れる。者、古、より、勘、り、を、壁、言、ひ、源、義、
經、の、佐、藤、忠、信、義、義、仲、の、樋、口、兼、光、及、近、世、の、妻、鹿、孫、三、郎、本、間、孫、四、郎、の、如、也、
枚、本、海、不、違、あ、る。其、們、小、も、及、ぶ。死、和、郎、の、主、君、里、見、親、子、の、年、來、仁、
政、の、夢、え、あり。あ、む、り、始、り、人、を、屠、り、て、地、を、奪、む。と、い、ふ。今、故、も、境、を、
犯、し、て、今、井、の、柵、も、火、攻、を、け、ん、當、柵、も、伐、畧、り、る。及、て、我、を、勇、る。と、い、ふ。
詰、る、は、是、什、麼、を、ぞ、と、聲、苛、高、く、答、る。と、小、文、五、は、冷、笑、ひ、て、知、む。と、這、上、
下、の、今、井、の、女、木、猿、江、の、民、も、我、君、里、見、殿、を、從、ひ、と、近、曾、扇、谷、の、音、

領豪奪奪きて暴河をりく封疆と唱へ今井河原及這妙見嶋小柵を構
々。水陸の通路杜絶不及と我君寛仁大度小して敢小邑の地を争ひぬ。仁
君豈虞苗の訟と要して墻小聞んや。夫何を。扇谷定正主へ反て心使
く。然むき然怨を怨として今番猛可諸侯と連ひて且水陸三路の大兵を
我房總を伐もきまの故我門の則當所の防禦使を進て敢人の城邑を
奪奪畧る者あねも然むるの備るらんや。其の故我悌順義兄弟大川莊外
義任と相共防禦の君命と辱して與行徳の山を傲せ雄兵八千駿馬良
船戰栗弓矢前銃火藥小至るまで東西皆足らざる。若れも五十子の大
敵干今寄も來せ坐して食へ樞も空一五穀の民の辛苦小成れる粒々司命の
至寶ると思ひて徒費の民の父母を如くはの故今我君里見殿の
封内なる這河の西岸小陣を徒て大敵と待ま欲まんとて今井妙見嶋の

二柵と其又除き取れ敢我より多く出でて人の柵を拔け人の地を掠めて便
とまるわを我有り所の地を復して便りよせんと思ふ。汝若備這義を
早く兩柵を退れ我の地の返さる推寄もつる五十子の大兵を負ひ
故小竟小自滅を取りあわぬや。信ても我君不仁にて人の地を奪ふと只咱
防禦使である。あつて大敵と待てて境を出踰。我より考けて暴虐を
傲せと思ひ違んぬ。と質を詞の理義當然の夜又吾數世の言を躬て頭を
低て黙然。小文吾呵々とうちを笑ひ。數世不向ひて又は汝みづら匹夫の男を
忠信兼光の比で云云といひ。過だる。若れも大石憲重憲儀の家臣の者皆
仁田山晋五等の類を思ひ。汝小勇あれ。身今虜なる。敢て
非理の理を。我對して争ひ。死を怕れざる者。似る。渡莫我里見殿の仁義の
君之殘小克殺を。去る。御本意違ひ。若れも。皆憎。と。首を刎。何

せ只兵具を剥きて。艦を棄せ海流して波のまに死活を儘せ。尚幸い中て恙なく。其船柴濱へ漂ひ就く。主の大石親子へあり。兩管領へも隠せとる。この言の條々を明々地々言え上よ。然れども放免の識る。其非を飾る。もあらん。兵毎の生口等の頭髪を漏さ。前か拾よ。その餘の事。箇様々々と見せ。く。吩咐れ。大家都て。果て。彦別數世と首。生口。柵兵百五六十名の鬚を剪り。衣一領。あて。寸鎌。身。帶。と。饒。船。中。戰。飯。塩。醬。柴。薪。採。穴。れる。者。五。六。艘。船。毎。放。免。の。生。口。を。送。る。く。相。載。く。妙。見。嶋。の。東。の。岸。より。大。洋。へ。推。流。索。勁。風。急。流。雨。多。一。霎。時。も。其。船。を。漂。せ。勢。以。宛。射。箭。の。如。く。任。方。知。知。る。けり。既。して。天。の。明。く。大。田。小。文。吾。悌。順。の。隊。の。士。卒。二。四。百。名。を。分。て。の。処。の。柵。守。を。自。餘。の。軍。兵。を。從。へ。艦。を。今。井。の。岸。に。渡。して。莊。が。伐。捕。る。河。原。に。柵。を。造。る。程。辰。の。半。の。り。けり。の。日。十。二。月。五。日。也。那。五。十。子。の。城。を。聚。合。る。敵。の。諸。將。

頭定成氏憲房朝良自瀧等八俱。那城を解去。水陸より。這行徳口と國府臺へ推寄せ。一時守を伐破り。と。連り。路。次。を。云。其。隊。配。進。退。の。第。百。五。十。九。回。見。え。る。と。既。是。同。日。の。日。の。時。五。十。子。の。寄。隊。の。大。將。上。杉。五。郎。丸。朝。良。千。葉。介。自。瀧。大。石。見。守。憲。重。原。播。磨。久。相。馬。郡。領。將。常。稻。戶。津。衛。由。充。等。の。路。近。く。な。り。い。ま。出。來。を。大。川。大。田。軍。議。後。夜。今。井。と。妙。見。嶋。の。兩。柵。を。破。る。と。敵。便。宜。あ。る。が。戰。以。難。義。我。及。ぶ。と。あ。る。を。微。妙。く。も。計。り。けり。夫。戰。の。勝。敗。の。地。の。理。の。据。る。の。遲。速。の。在。り。五。十。子。の。寄。隊。數。萬。騎。と。輒。自。瀧。河。を。渡。り。勝。を。取。る。と。か。ら。る。と。知。り。あ。る。人。の。評。けり。間。話。休。題。介。程。の。大。川。莊。が。義。任。の。逃。る。後。嶋。將。衛。生。拘。ん。と。満。呂。復。五。郎。再。太。郎。安。西。就。介。等。先。を。打。て。從。兵。一。千。五。百。と。馳。立。々。々。趕。ら。けり。下。今。井。と。木。下。川。頭。の。処。々。の。枝。流。の。去。向。自。身。の。言。れ。も。逃。る。者。路。を。擇。ま。



莊の
 射の
 旗の
 緒を
 断る
 の陣

趕ふ者へ人馬の脚を損ハドと云。川は葎の樹を伐せし投架一とせし程由思ふ
 亦似ぞ時程りて。葎江の莊を趕り來れり既高亭午ありけり。あの時後嶋
 將衝と其隊の殘兵も逃脚早く迫ふ延く。あまをりし。こえれが又前向より忽
 馬とて出來ぬ。雄々あは一隊の軍兵あり其勢約一千五六百有とて一隊伍を
 亂さ其隊の長と見え一將鎧の絨緒華ちるを馬上優ふ足掻を操せて
 間近くる隨ふ今敵と見て慌と噪かを備と早く魚鱗の構て敵推せ鬼ら代破
 らんと弓も銃も先立せし。悄然とて音もせし。莊は遙不足を見て是必五十
 子より來ぬ先鋒の二將ありと思ひ馬を找ゆ。近づく隨ふを旗を瞻仰る
 一雙矢筈の花號あり下北越庄貝一大女丈夫腹大刀自代軍船戸津衛由元
 との二十一字と大罍者あり。莊は憶む合喚るが。士卒と制め馬を找る。右小
 滿呂重時安西景重あり。左不滿呂信重あり。間を距ると遠くを莊は程よく

馬を駐め。みづから聲高き吸るや。其里より一陣の隊長と船戸主と知る。旗
 旗高きれ文字也。問でも既紛れる。恁に我の里見の防御使大川莊義任是
 り。船戸主の對面してのまき。不たとあれ。姑且前丸を飛せ。敢請ふ陣頭
 出のふと喚りけり。登時寄隊の弓も銃も左右へ颯と辟く。聊旗を麻非せ見
 れ。船戸由元馬を徐々と歩せ。右は秋井三郎あり。左は妻有復六あり。登時船
 戸由元馬を陣頭に乗居て位と莊は向ひて一別以來大川王君もあつと
 其地。和殿今里見の君仕へる地の軍陣の防御使。とせえ。反々封
 疆とち踰。入寇あぬ。其麻を。と詰るを莊は。鞍の前輪。額に
 衝て。恩人安泰。終るべ。相別を。天の一方。榮辱時。恩仇差。あり。裏の
 稟より。我義任不似。と。里見殿。不は。用ひ。れ。を。を。義兄弟。大田小文吾
 梯順等と相共。今番當所の防御使を辱せ。介ふ。這女木。葎江。の

諸邑の里見新附の領所を越え、更敵地に入らるる。今試み
其非を論せ、扇谷殿初より連帥の貴重なるを、切ら今井河を而藩の封疆と唱て
柵と今井と妙見嶋構へ、その故我義任犬田輝順と二隊もて、昨夜那二
柵を破りて逃るるを逐ひつゝ、その地方を奪ひ、則我職分を、恁ても領所敵待
つゝ、敢境を犯さず、既りて今憶ぎも敵の先鋒相逢ひ、勝負を一時決
せん。お我職分勿論を、いふせ、義任浮浪より、時大田小文吾と俱必死の
窮厄に遇り、お恩人知己の好情、おもて情地を免るゝこと、恁て相別るゝ及び、
義任則恩人の誓言も、我身倘幸い、未生以前の宿因を、異日里見殿に仕
且當家と兵を構るとあり、倘恩人と對陣せ、二舎を避て、洪恩篤義に答へ、
んと、お料をも、今その地方を、其誓言を果せ、至るゝこと、お死なれ、小文吾
妙見嶋を、敵に伐拂へ、昨夜那柵、お向ひ、今その陣、お在る、されども、他も亦大

人の誓恩に答へ、欲し、我と向ひ、恁に、今日、おは、是我君の命令
人情を、私議を、公道人情、面を、虧ぎ、無き、樹を、われ、い、お、
負ふ、上刺の征箭、一條と、抜合、て、鏃を、お、直、其前を、刺、て、
満月の像、く、彎固、の、稲戸、津衛、の後、建、る、旗を、お、礮と、射、る、矢、局、差、の、を、
旗の緒を、標、弗と、射、断、り、旗、の、天、を、射、上、さ、れ、て、一、朶、の、横、雲、風、別、れ、て、峯
上の、松、お、搦、る、一、霎、時、閃、と、見、る、程、の、後、陣、の、お、墜、し、敵、も、自、家、も、聲、を、
合、て、射、ら、く、と、言、散、動、め、る、亟、の、鳴、り、も、已、ら、け、り、登、時、莊、お、杖、を、又、由
元、お、ち、向、ひ、く、稲、戸、主、是、ま、ま、再、會、の、異、日、の、便、宜、お、任、せ、ぬ、お、
馬、の、響、を、乘、旋、り、し、て、今、井、を、投、て、退、け、満、呂、重、時、殿、も、衆、兵、齊、月、々、救、止、
と、徐、お、前、後、お、從、ひ、け、り、お、れ、を、目、送、る、寄、隊、の、士、卒、お、皆、忙、然、
六、休、難、て、由、元、お、薦、る、多、う、那、犬、川、莊、お、奸、雄、る、言、と、設、け、射、藝、を、示、し、て、

大傳七拜卷下
十九

退る勝を知らず今敢て代も後難免れぬかへとの由
 元頭を掉す否々他は甚世の義士みだり義任と喚做せる各小恥ざる死進止
 見て思ひ心術武藝我敵も過たさ然れ他義の仗々三舎と避け我の義
 背は是を拜ひ縦戦克とも武士の數少入らば我意も左傳不晋文公
 三舎と避る事あり三舎の幾里ると知る因て今按ず唐山の里法十里一
 亭五里一舎といふ那土一里則是我皇國の六町有奇也此中野云阪東道
 是は是の由て此を親れ一舎則三十町三舎當九十町なり或は又十里一
 亭三里一舎といふも口只の大際との取里數も泥ひて那莊其
 才文武不富りの義を知て退る抑亦君子たるを里見少かの如知智勇
 忠義の武士八名あり兩管領家勢ともいふ戦て勝負を知るべし梅の
 我老夫人の軍代也只得這回管領家の催促に従ひ一者然る勝と

文溪堂藏

知る戦を我士卒と云く喪をあらは反く是不忠也世の鄙語云三舎童子下
 身力壯藝と云ふも少かるべし權且病病の推け安危を見る小あくと
 嗟嘆して隨即秋井三郎は雜兵四五名に従せてその地へ寄隊の惣大将上杉五郎丸
 朝良の後見する大石見守憲重陣遣して告る由元近年多病なるゆゑ
 曉の風寒も冒され故秋猛可持病の疔積積りて騎馬の擇れ做らぬら姑且
 後陣を退れて將息をせまき欲を先鋒を免除せよと辭を馳て隊兵を故
 ごとく小従へ西國河の方へ退りけり有はる程の寄隊の西大将朝良自胤を艦
 舟西國河に着陣は是より東へ入江の枝川より且枯蘆文敏をかれ兵を用
 る地方小あまると大石憲重が計以稟せよとの旨則人馬を我れ五本松の曠野を
 本陣とて又陸路を來る自家の士卒は原胤久相馬將常小従て西國河の舟
 橋より渡して俱に五本松の本陣に着到るゆゑ中先鋒の頭人稲戸由元

文溪堂藏

一隊の敵の在る所を極んと。猿江の方の造ると云其事の上と云る如。其の外は路次
 多く馳加りける。幾隊の野武士と云るは。惣軍二萬五千餘騎の曠野陣屋敷
 連ね。其本局の像く構へる勢ひかゝる。されども既先鋒の頭人。小稲戸津衛由
 充の時病發りぬと。辨ふ猿江より引へ。と云る。他が一隊の五本松の造りを
 人皆是を誣く思ふ。又今井妙見嶋二柵の頭人小越小權大表練。援嶋郡司將
 衛彦別夜又吾數世等。昨夜里見の防御使大川莊小大田小文吾柵を火攻
 せし。且表練の敵小敵も。命を預。將衛の辛く脱れ。其殘兵と共に逃。當
 陣の末で敗軍の朝心も。又妙見嶋より數世が隊兵。而三名才小免。其來り。是
 より彦別夜又吾が敗軍。其為体。他們的數世と首。多く敵小生。拘れ刺。頭髪を
 剪。捨れ。鹿舟に載られ。大洋へ推流され。る。その時。小具。又。或。又。莊。小。文
 吾。が。猿。江。逆。井。も。と。里。見。の。所。領。と。云。那。該。と。告。一。六。朝。良。自。瀧。怒。り。堪。不。疾。

將衛と牽出して首を削りて敗軍の罪と士卒小示さむ。自家の弱し。小做ら。疾々
 せよ。といふ。其將衛の駭怖れて。戦死する。兄將常。向ひて。陳。を。す。小。臣。を。敗。軍
 不覺の罪。今。り。償。小。由。る。けれ。も。敵。一。萬。の。勢。也。臣。等。の。隊。兵。千。五。百。の。過。也。
 妙見嶋の士卒五百名。の。寡。也。とい。り。て。鬼。小。勝。り。ひ。え。や。倘。一。日。風。く。御。勢。が。我
 當所。小。よ。き。せ。ぬ。ひ。る。臣。等。が。敗。軍。を。う。ん。の。後。悔。是。非。の。及。ぶ。小。あ。わ。る。願。ふ。權。且
 首を假して。今宵。逞兵。四。五。百。と。授。け。さ。む。敵。の。陣。所。夜。擊。し。て。那。大。面。箇。の。首。を
 捕。て。先。度。の。恥。を。雪。む。べ。但。自家。の。野心。内。應。の。者。あ。ら。計。策。漏。目。勿。ろ。就。て。疑
 ぶ。死。の。別。入。る。を。北。越。片。貝。殿。の。軍。代。小。稻。戸。津。衛。由。充。是。の。他。の。先。鋒。を。奉。り。て
 御高。小。猿。江。の。造。り。時。敵。の。隊長。大。川。莊。小。撞。見。ひ。小。笠。前。を。射。さ。ま。ま。を。交。へ。其
 退。く。と。自。送。り。て。那。身。の。反。り。急。病。小。推。け。辭。ひ。景。し。て。當。御。陣。へ。も。參。ら。る。其。内。心
 量。の。か。ら。る。故。小。忠。告。仕。り。ぬ。あ。の。を。り。て。因。免。の。執。成。を。願。い。けれ。と。哀。し。請。れ。り

將常の有數系の胞兄弟の急難同息を切るるが為上坐侍りて兩家老
輩大石憲重原胤久の義を告て愚心弟將衡が死刑を宥めて今宵の夜
伐を饒まぬの臣等も他と共侶の敵の仇を推寄て莊小文吾隊の兵每を
血せき多く欲まといてと度儀を憲重胤久らち告てあはれ由われがと俱
遠く找ま出く兩主君自衛を諫るを將衡も敗軍の罪饒されぬ似ていへ
ども敵の一萬自家の小勢敵一ゆりたも故るはれ然れば將衡並將常願の
まふ敵の仇を夜伐させ其功あふ前罪を償ふ足るべし敵一人も數を捕
らぬ自家の隊長を誅しぬ之恩怨早く地を易ての之敵を笑るべし賢慮を仰
せんと詞存く執成を朝良自胤らち告て黙然たるを半响許すや中朝
良の憲重らち向ひて後嶋將衡の千葉の家臣を我が左右に死なせむと
く小稲戸由充の逆意の告訴を承ふあむを也他我が外祖母腹大刀自の

軍代を野心ある死ねぬ景春既和順を参ら今小至て来會せぬよの義心許
る。とられ憲重然に那由充が敵小逢参り戦ざりて為体の方僅後嶋將衡が
告まらむ然びとて其事の虚实分明るるが自家の隊長を疑ひぬ二萬の
士卒鬼胎を抱てよく戦ふ者あむるべし非如由充逆意ありとも他僅小一
餘の比兵の長るるの何事とあるは姑且度外措せぬと情や論れ胤各
亦其主自胤と和解ゆ將衡と救ひぬぬのさるる其兄相馬將常と共侶
夜伐の願ひと許容あり則逞兵一千と授け敵を襲せり。

第百十五回 莊小伏を設く夜將衡を擒まむ
小文吾勇を大奮く就鳥熊を數手り

小程の犬川莊小其隊の士卒を従て今井の柵をかの既中て大田
小文五只妙見嶋より隊兵を渡して夙這里候て居り這柵の燬を免れ守

屋と修理する敵の脱棄する甲由器械るどの刃死にけり。倉庫の燬の被
らけり。戦米さ故の随多と枚奉る不違わを登時莊小文五口生る昨
夕の柵と攻落ける事の趣且逃る將衛と追蒐て憶ぞ猿江の造り時五
十子より末身先鋒の頭人稲戸津衛由亮と撞見奉る那舊恩を謝を死
為小竟は先言と果ける事恁々と説示せ小文五口顧感嘆して我亦那余
稟る再生の恩ある尚一言の謝義由る況や今刃と交る怨敵さ折
よく和殿那義を果るひい定小れ羨む。却咱の妙見嶋を攻破る柵の
頭人彦別夜又吾數世を生物りか我君の御本意不違て殺す要ると
思ひければ命を饒る生物約百五六十名の頭鬘を首剪捨て下分ち船に乗
る小數日の飯米柴薪と取せて海へ流し流るる莊にけり。と明く深く感服
る。席を譲りて却り我が這柵を抜ける和殿の妙見嶋を伐捕り其軍

功相似れ我隊兵之満呂再太郎が這柵の頭人小越小權大表練と殺捕
りし首を身く敵と殺しら然る和殿の妙見嶋を一個の敵も殺戮す其
頭鬘を首剪捨て流し遣り仁者の術を是則御の本意稱ふ我が
及ぶたあはれ知又我の漫敵と趕る寄隊の大兵の末を思を那時我尙
寄隊の逢り多く士卒を失ふ。給と云恰と云巧拙已分明日もして當所の
防衛使の上座と和殿を譲りて我の則副將おるん。と云小文五口も大川其
議の兼引が。支兵を凶器をり。と云戰場に誰か者誰か敵と殺す。と云
勝を取るとわらんや。その故の御軍令敵と生物ると第一と見敷を捕ら
又其次と做す。と云これわらぬ殺す罪と云。然るにや。這里と妙見嶋小
敵とい寄隊の大軍と戦む。何ぞ軍功の甲しと論ぶ。其斟酌の要る。と
詞を聲して推辭とも莊々所を頭を掉て昔陸奥の戦ひ義家朝臣も自

家之士卒小剛臆の席を分ちて剛なる者推登後れ者退けて励みあひ

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

八代傳九輯卷三十一 苗 文溪堂藏

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

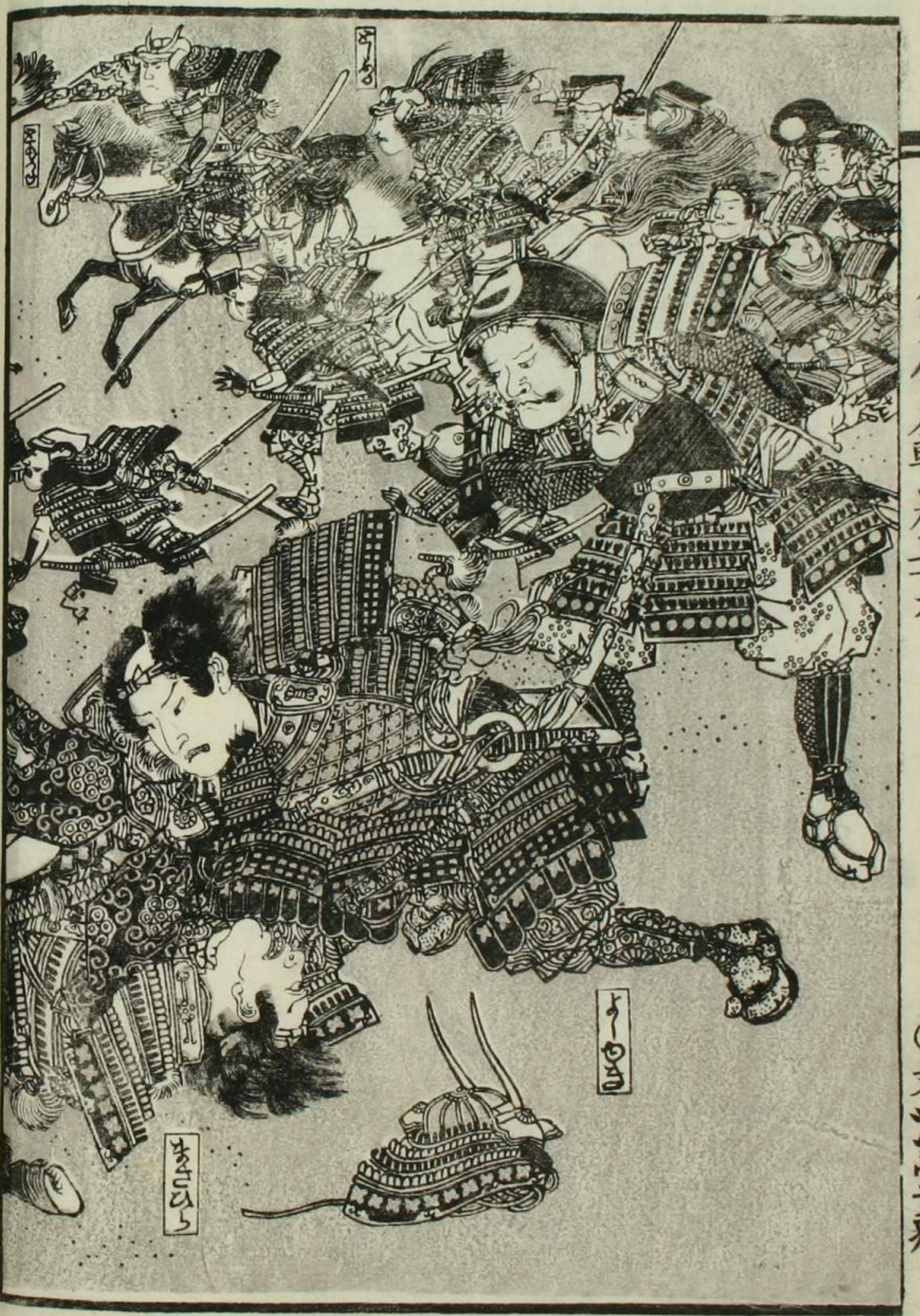
天子の征て敢伐せむ諸侯の伐て敢征せむ征の正身と正くも人正くも

まへ自家地へ館持大樟二隊の兵も又用る所あらん和殿の計極めて好昨夜の
甲し箇様々々任心々のるえとて莊小文吾の慈善の計いと告知され小文吾の
亦莊小文吾の恩人由元の一隊不逢ひ折三合と避て舊恩の答一事の趣と
敢自那非と誅て防禦使の上席と譲りける心操さ恁々と迭代り説示せ
良干朝経俊故等の共侶は敬服して感戴と大々々を猶且餘説及ぶ程
冬の日既おは果て點燭時候あるにけり折る今井河の瀬およく集集水鳥
あり猛可小物も駭く如く發と立ち着着响響しく東を投て翔りし莊介遙瞻仰
小文吾の心を大田和殿の心屬るを今故も群鳥の聲に立て東へ去りし
敵は今宵我陣へ夜敷も去死非るんと小文吾も推量宜し其理あり
初めの柵の頭人等小越小權大の果敢る敷も後嶋郡司將衡の辛く命を免
れて寄隊の陣へ加りけん然る恥と雪んも今宵又來て虎の影を披き欲さ

るもあへ先之備を故きと答ふ莊介再議及ぶも隨即登桐山八良干と
館持朝経大樟俊故小事恁々と叫示る和殿の新隊へ今宵陣頭
埋伏して敵推寄來る生拘りぬと良干朝経も俊故も悦び退て退
備もあまけ小程は後嶋郡司將衡の其兄相馬郡領將常と相共一千餘騎を
二隊に分ち人の枚と衛と馬と鑢子と被て夜の夜子二の比及小今井河原の柵
推寄ま將衡の逞兵五百名と先我を將常も亦五六百の兵を従へ
陸續として後陣在の恁而後嶋將衡の既我を近就て敵の虚実を窺
柵の門戸の半分焼て出入の便も直々と馬を找め士卒齊一柵へ
内殊小蕭然と敵一人もあまけられ將衡訝り疑ひて原來敵も備あり兵
毎早く退れと喚る聲も果敢間お忽馬として左右の樹柵の陰より暗
晝とがやく敵の發る鑢砲の聲と响程もあまけ咄と颯と喊の聲と俱陣

敷の音響く左の方より館持朝經又右の方より大樟俊故各五百の隊兵を
找めり左右齊一掃令り慌忙噪々寄隊の士卒と瞬息間突崩せ誰ら
一柱一約死將衛の徑馬を返して外面投ぎ逃れ後陣不續相馬將常
入替敵を柱を馬を跳せ鎗を拵り近つ敵を突伏々々士卒を駈て挑戦ふ勢
ひ悍くうづらふあざれ將衛も稍立直して又相資けて柱をさす背後不起る敵の伏
兵是則別人を毛登桐山八良干又是五百の雄兵をり透間あはせ夜代
程の寄隊の前後三方の敵の當る違う乱れて走る開か中將衛の退れ後れ
良干と鎗を合して先途と戦ひ良干や武藝勝り將衛が尖頭乱
れる鎗と裏理と反落して怯む左の引着る馬上是を生拘り一將擒
るる其隊兵或の逃去り或の又降参あて馬前の塵を拂ふ言る有徳るあ
程の相馬郡領將常の辛く一方を殺脱て従ふ隊兵百名許と共五本松と

投て走りし惘然とあて馬を駐めて左右不立る隊兵をみ我救ふ弟
將衛を幫助んと漫る夜敷を做損して將衛の敵不生物れ我も亦隊兵を
引く敷をせまあ不至れ因て意不我王將千葉赤殿の只管血と氣の勇不誇り敢
始終の勝を思ひあて御向將衛が敗軍と甚しく怒譴て首を刎と下
知せられ我をなす救ひ死又總大将扇合の朝良主尚是乳臭は少年を
れ俱不血氣不喘るの取老黨を敬むるは我今あはの為体中阿空とと
あて五本松を本陣かひ参ら必又那怒り不逢ふ可惜首を刎るべ武
士若る敵の為命を捨てて後世まで名も貽る自家の為形多綁
首と敷をれる世の胡慮ふるふあ去向の吉凶を思不慮か取主と知り
五本松へ還る危し我の情地本國千葉赤起て孝治主不身を寓き欲を
汝達我に従ふ共侶不千葉合ふ若又欲するやあ速不立去らね我決



あて怨る。とをを大家うちつて。我々のあふ年来御恩の下ひひ。今あの時ひふ
あふ君と誓て已が。那里あふ身を願死。只投き方へ召れ火皆御伴を願
けれと異口同様お告り。将常欽ひ領に。然や六のそ氏と路引違へ。形貌と裏ら
間道より。主僕俱に千番葉の。孝胤小降参まけり。相馬の千番葉の親族を
将常弟兄故めて。年来石濱の千番葉の。今あふ難きを。方々を。将常
音。其隊兵を。身と孝胤不寓せ。孝胤欽ひて。是を疑ふ。則本領を
還へ。家老の列を侍を。あは是後の話へ。今程ふ。今井河原る。里見の
柵。登桐山八郎良干。館持備杖朝。經大樟村主俊。故。大川大田の軍
配。従ふ。其夜。又。寄隊の頭人。後嶋将衡を。首。生口及降。参。兵母
皆數珠。俱。柵の正廳の檐廊の下。集。大田大川。兩將。實檢
お七人。登時。大田小文五。保順。大川。莊。義任。満呂。安西。等の諸士を。従

へ。廳の上。坐。在。先。其。生。只。交。名。を。閱。ま。る。夜。敷。の。頭。人。後。嶋。郡。司。將。衡。を。
登。桐。山。八。郎。是。を。生。拘。り。又。將。衡。の。從。母。弟。比。田。鳴。子。村。會。を。館。持。備。杖。の。隊。小。
擒。小。又。相。馬。郡。領。將。常。の。家。臣。と。交。を。渡。谷。柿。八。郎。足。脱。を。大。樟。村。主。生。拘。
けり。軍功。孰も。紛。れ。あ。ら。ず。當。下。大。川。莊。高。く。燈。燭。を。抗。さ。せ。佐。と。將。衡。を。相。く。
命。を。餓。る。宛。是。夏。の。虫。燈。花。入。る。小。似。り。あ。れ。ど。我。君。里。見。殿。へ。仁。義。を。
旨。と。あ。の。我。們。も。亦。其。軍。令。を。守。り。て。戦。ひ。勝。も。敢。殺。戮。を。決。心。し。せ。縦。今。和。
郎。等。を。皆。悉。誅。ま。る。も。寄。隊。の。弱。さ。を。承。知。る。あ。ら。う。と。小。文。五。も。亦。我。
昨夜。妙。見。嶋。の。柵。を。拔。け。時。柵。の。頭。人。彦。別。夜。又。吾。と。其。隊。兵。を。擒。し。せ。を。
船。に。乗。せ。流。し。遣。り。け。例。も。あ。れ。汝。等。も。還。ら。ん。と。願。ひ。皆。放。ち。遣。り。又。直。上。て。
勝負。を。決。せ。兵。每。其。降。人。と。生。口。の。索。を。皆。解。捨。よ。と。云。下。知。不。從。繩。令。の。

雑兵等ハ阿と答に隨即將衡足脱村禽等ハ被る索と解に六將衡と云

且羞く頭を搔くや身を二天士に向ひて在下者不肖のくみりてみづから量らむ

先度の恥を雪んと身ハ今楚囚ハ做れど猶再生の慈恩ハ逢ふ飲ハ何事歟

是ハ優劣死たれども我主將自亂朝良ハみづから血氣の勇を負て敗軍に立

饒ハ主徳高ハ在下戦利の中ハ柵を喪ひ時自亂怒甚る既ハ死刑ハ處せ

られど我兄相馬將常ハ身を救ひ給へ則俱ハ今日の夜撃を命せられし

今宵ハ亦戦ハ負く僅ハ命を免れよ故ハ陣所へ還りて自亂るハ勢ハ又

層の怒を増く首と刳られしハ柵と去り明ハ就るハ天日を見ずハ由るハ不

失く賢ハ不得ぬハ管仲百里美ハ甘ん所多ハ願ハ今より御ハ不屬ハ

生の恩ハ報んハ美を許容われと亦他事ハ多ク答ハ比田鳴子ハ村禽ハ

亦是援嶋の外威ハ情願得衡ハ異るハ留られんと云獨洪ハ谷柿

八郎足脱ハ主ゆハ將常ハ叛れて二張の弓と奪ぐハも放ち還させぬハ

るハ安危ハ將常ハ俱ハ見ハの美を願ハまうハの莊ハ是をうち奪て犬田の意

見什麼と問ハ小文五ハ答て然ハよ既ハ比皆助命の上ハ留らせ願ハ者ハ留め

是を用てハかり去んと請ハ者ハ放ち遣るハまうハを良ハ干ハ然ハ二天士ハ諫

めハのまうハ兩君仁慈ハ計ハ則館の御本意ハ思ハ意を舒ハ憚ハあまどハ

人の心術ハ測りて今將衡ハ命を饒ハて救ハ用ハ以ハ爾ハ黃ハハ虎ハ割齒

悔ハ今と志ハつた況ハ還らせ願ハ身ハ足脱ハ放ち遣るハ寄隊ハ我備ハの虚

實を知られん然學時ハ是ハ亦冤家ハ刃ハ借ハし似ハ只是ハ千慮ハ一失

然猶再思ハを願ハけれハのハ莊ハ今より奪て登桐和殿ハ小心ハ以ハるハあ

ねハ都ハ將ハるハ巧拙ハ兩人局ハ相對ハ象棋ハ勝負ハ争ハ異ハるハ

其ハ高ハるハ敵者ハ其敵ハの馬を取て己ハ有ハて使ハれハ則是ハ敵ハ

犬傳九拜卷三十一 苑 文選堂藏

の敵を攻るも段あり又其拙死者の偶敵の馬を溺るも用る所を知らぬ程
 殺して竟不要る。意不介今寄隊の両大将自瀧も朝良も士卒と用る不拙
 死者之將衡と足脱等と用捨の事も道理よりて克思つ。必疑ひるべしと
 諭其良干感服して又よりゆるりし。小文吾差左の尉也。則援嶋將衡
 と比田鳴子介村禽と其徒兵一百餘名と相共良干の隊小屬也。則先鋒
 小頭人と志又渋谷柿八郎足脱と願ひまゝ五本松を寄隊の陣へ還しけり。
 是よりて寄隊の二萬五千餘騎朝良自瀧兩大将也。昨日五本松の着陣の
 事の趣を詳小傳えり。左右より程小天の明へ大田小文吾大川莊介の日の戰
 の隊配と定る。滿呂復五郎重時が公争。少く寄隊の兩大将朝良自瀧半
 少けれ思慮足らぬ。俱は血氣小喘るといへ。將常將衡が敗軍と怒り必推寄
 來り。あはれ何と。と眞實立て向へ。莊介點頭て我も如右思ふ。遮莫人の

邊枯草處々小敏多立て人馬の進退妙多。先々今も諸隊と我も五本松の
 這方多。曠野少く敵と俟んと。小文吾もこの議を好とて。隨即登桐山八郎良
 干と先鋒中。援嶋郡司將衡と比田鳴子介村禽を左右の羽翼と。又滿呂復
 五郎重時を後陣の頭人中。小文吾莊介。滿呂再太郎信重安西就介景重
 等の諸勇士を従へ。陣の中央に在り。其勢約莫六千餘騎人火飽を戰飯
 喫せ馬火ヨク豆草と飼也。徐小士卒と練也。今井河原多柵の成を館持
 儀杖朝經と大樟村主俊故。其隊の兵千百十數名と従へ。權且あ小留置
 けり。有急の程。寄隊の陣中其曉天。渋谷柿八郎足脱並將常隊兵の
 主將の逐電の如き。知を逃るるも。勘らざる。又自瀧の士卒の昨夜將衡の
 隊小隸られ。井中將衡の從り。あはれ。都て是もが朝經也。昨夜
 將常將衡が敗軍の事の顛末將衡の敵小生拘れて。隊の兵と俱皆二天。隆參

あるの久將常の辛く困を殺脱けり。いさ當御陣小から参らざる敗軍の罪
 怖れ。遂電あつるらん。朝良自胤是を以て且駭馬を且又怒る大なる。いさ
 人少波谷柿八等其殘兵敵小降して反々嗚呼と害せん。敵の與刺客の傲を
 かの東身あをむざらん。一個も送る首を刎よ。云自胤ハ朝良小思つる死を直
 羞く勢ハ燃る火の如し。朝良も亦この疑ハれハ俱ハ饒志くもあつり。原播磨
 小胤久が詞を盡し是を諫め。足脱と殘兵等の命を宥め。自胤朝良ハ
 猶疑ハ解け。皆陣中ハ囚置せ。緊多くこれを守せけり。然りければ朝良自胤ハ
 怒り尚理ら老徑ハ今井推寄。建賊將衡村會ハ。いさ惡二天們ハ血而て
 夙上總ハ攻入る軍功必二の所ハ然と一日も休てあ。其熱腸ハ遣
 かり。兩將夙ハ軍議を定め。則人馬ハ推少。自胤みづろ先陣。當
 時山東中野武士剛人と呼ぶ。上水四郎東三赤熊如牛太猛勢ハ先

鋒の頭人。中て多嵐剛四郎。渡羽麻三。左右の副と。原胤久も是ハ從ふ。次ハ
 則總大將朝良ハ朝良の日の打扮ハ小櫻絨の鎧錦綉の戰袍ハ龍頭打
 尾五枚兜ハ戴。其金造の大刀ハ自胤皮の尻鞆。單て桃花の三歲駒ハ真紅
 厚總曳せ。貝錦の四下も赫赤火可。鞍措さ。跨て征前二十四神。夫
 般ハ駝做。左ハ重藤の弓ハ握持。徐ハ馬を歩せ。左右ハ從ハ近臣勇士
 松山小利作。人間尉藏建柴破麻。鬼介麻生。一郎等皆華麗ハ振甲。ふる。枚擧
 る。水龍を屠る不足。勢ハ振然。既ハ朝良自胤ハ。この幾
 ら先二騎の斥候を遣。敵の形勢ハ張る。其斥候の騎馬馳。敵
 亦今井より推。既ハ這野盡。不在。相距る。遠。計。其勢五六千
 尖過。父を自胤。後陣ハ。告。前後齊一。救。皆直

急ぎに推隨おしづきの風かぜに敵陣かき相並あひあひり果たまして里見さとみの防御使ぼうえいしへ前後ぜんご二備ふたを大田おほの
 小文吾こぶんご悌順ていじゆん先陣せんじんより又大川おほのかわ莊ぢやう小義任せうぎにん其後陣そのごじん將せうとて寄隊よせたいを待まち多おほ
 下くだ徳而東西相逼とくじゆんる程ほど不陣ふじん鼓つづみを鳴なり。士卒しよそを找たづめて箭やを射い半はん九く飛とて
 挑争てうしやうふと半响はんきやう許寄隊よせたいも里見さとみ方も各矢傷あつやぶを負おふ兵へいあれども。一ひと人ひと抜ぬけ
 身み長なが五尺八九寸ごせふちやうはつこ多おほ。両個りやうこの大漢おほのたかん俱とも
 鳥草絨とりくさじゆの鎧よろい一對いっとう多おほ。巨刃こおの鎗やりと腋わき扱ある。馬うまの奔はるを仰張おほかき。敵かき向むかひて喚な
 号ごう。登のぼり人々ひとら。迷まい一ひと霎しやく時とき矢や九く飛とて是こゝは千葉殿ちやうはつとのの御内みうちにて數度あまたの戰いくさ以後いご
 れを取とる然しかる者ものありと知しれる。嵐あらし剛ごう四郎しやう高成たかなる波羽なば原はら弘ひろるを。豫よら世よ
 人ひとの里見さとみの犬士いぬしと喚なれる。小文吾こぶんごの那里な在ある。莊ぢやうの疾はや出でて俱とも勝かち負まけと決けせよと
 両聲りやうせい享やう指招さしけ。登のぼり桐山きりやま八はち少せうあを憎にくむ。那奴な奴なの廣言ひろげ哉や。腮は引ひ裂ひれ衣いをきんぎと
 馬うま拍たれぬんと。援えん嶋じま將せう衡へい推おし林はやしめ。在下したも今いま這こ先鋒せんぽう小從せうへ。二ふた人の

功いさる。嵐あらし波羽なば本ほん事じの知しる。咱われも任まかしめ。請こひ比田ひた村むら會あひ目めと注つし。
 騎相並かきあひあひる。馬上うまの上に鎗やりと打振うち々々々々。甚ま直ちよく馳かれ。鳴なり。村むら會あひも後あれと。俱とも
 敵かきと逆さかり。波羽なばの嵐あらし是こゝと相あひ。主ま不ふ叛はん。兩股りやうこ武士ぶし若わか者ものの我敵われかきの足あしを
 疾はや二ふた犬士いぬしと出でる。果たまに將せう衡へい村むら會あひ鎗やり閃ひらめりて刺さす。我われむ。高成たかなると原はら
 弘ひろの俱とも相逆あひさかり。鎗やりと合あひ。一ひと上かみ一ひと下したと術じゆつと盡つく。互たがひ相あ知しる。同どう士しと。後ご聞きと。恥ち朋ぽう
 輩たひの訕あり。思おもひ。毫ちよも距きよも高成たかなると原はら弘ひろ。既すでに痛いた癩れを負おふ。又また將せう衡へいと村むら
 會あひ敵かきの鎗やり下くだ馬うまと斃ころされて。俱とも歩あむ。將せう衡へいの嵐あらし高成たかなると。突つけ付けて
 首くびと捕とり。村むら會あひも亦また波羽なば原はら弘ひろの呪のろを罵ののし。刺さす。仰おほり。反ひり。仆ふれて。死しで。浩か
 処ところ寄隊よせたいの陣ちんより。金剛力士こんごうりき不ふ異いる。反ひ猛まう者もの一ひと騎き馳かせ。既すでに退ひれ去さる。下くだり。け
 將せう衡へいと村むら會あひと反ひ賊ぞく。心こゝろと喚なり。四よ五ご十じゆ斤ひん多おほ鐵てつ撮と棒ぼうと。輕かろく引ひ提ひり。馬うま
 走まり。末すえて敷しきふ。是こゝは則すなはち別人べつじんと。千葉ちやうはつ自みづか溜るの陣ちん中ちゆうで。本朝ほんてうの呂布りふと負ま

武藏十束の野武士の長上水四郎東三是入將衡と村會戰既小疲
勞れかとも敵小喚れて一步も退くべからずと相並て鎗と構て立逆ると東三物とせ
鐵撮棒とて兩個の敵の鎗と打拂ひ駈惱して梳む村會の鬼の天邊を力不儘
去て礮と敷き敷き比田村會の首の洞へ滅入る云とも死んでけり將衡是不整
慌て引外て逃んとせと東三透さ馬の上も鎗の總角引扱と左の小楚と引差若て
鎗と鳴りて丁と蹴る蹴れと叫ぶ將衡は小尚鎗と持さう二間許怪飛さる
野中不立る巨石小背と撲せ甲も骨も碎けて息絶おけり當里見の先鋒の頭人
登桐山八郎良干いの為体と見る不地堪も突然とて只一騎敵小向いて喚る
連武藝勁力。和主誰と向せも果東三眼と瞪り。若們如死仇武者
名告知まる我あはも疾小文吾と出さる。馬の誇る舌も引せ良干怒て入む
眉尖刀と束三又鐵撮棒と受流一打合て姑且挑と戦ふ程小良干勢小始小似

既小危く見や久満呂再太郎休難く走り必んとせり。小文吾急小喚禁めて信
重あね那奴が力藝和郎も及ぶ所あはれ。と云も四下と見ると這頭小故
たる檜樹の周匝一尺の餘る大枝這方小指本と小文吾らも見て是究竟と馬と
樹下人乗とせ馬の上其枝を引とる最大れも輭弱小做り。其幹際も反折て
小枝を裂拾梢と拂いて長六尺許る生木の棒小造做去と挾と馳せ。莊小驚馬と
林に小文吾勢小壯と。毫も諫と听さけり。小程小登桐山良干の上水四郎東三小眉
尖刀の柄を打折れて克くもあはれ早くも馬を棄旋りて飛が似小引退くと東
三猶饒さ下と。鎗と蹴立て趕蒐る。小文吾既小陣頭と馬を走らせ来て立替は
馬上の武者態問いでも知る羽中の大鵬。毛裏の殺祝人小境小入る如く。佐と東三を遮
留めて。やれ勁敵姑且止れ我は是里見の防衛使大田小文吾。悞順入爾辱我を請ふ
我の雨を知る名告れくと回せもあはれ。大田秋とんれ雨知事。己様。坂東隨一の



上水田郎

八代傳七郎卷二六

苗

○文溪堂藏



小文吾

赤能おんきう太

鷲鵬非不强
熊非不猛惟不
如是犬之真勇

剛者昔の公時義秀と比喩る猶過たる萬丈無當の勇とて石濱殿（石濱殿は石濱の殿と云ふ）に負れて
 當陣先鋒の頭人上水相四郎東三是れ狗兎の素も異衆就鳥の餌なるぬ名詮自性
 只一撃の結果ゆきせん今年今月今日正其身の命日とて自知して棒を喫むと暗喩
 丁々礮と受流し又打合する力藝剽姚現任佐あるる今防禦使の大任ゆ
 たる賢者の拵は皆実るれ百の和四郎一度小向く勝ちてとて此一犬不及
 びやと人の稱へ馬の嘶く自家のや寄隊の士卒の皆打長視て忙然る這兩雄の戦
 ひ甲乙あり東三危く見え寄隊の陣より又一騎東三を資んと最大に鉄鉞（鉄鉞は鉞の一種）の左肩小
 ら横て馬を飛せ馳出けり是れ是甚麻公の猛者ぞ并り又下の回解分ると聴ねり
 南總里見八犬傳第九輯卷之三十六終

十六編五巻之内

三十六

松野

猪名院

